平成２３年度　矢掛町立小田小学校　学校評価書

校長　　岡村　昭春

本校のミッション
・学校は子どもたちの健やかな成長の場として、生きる力を身に付けさせるよう、問題解決的な学習や体験的な学習を中心に工夫した教育活動を推進する。また、学校は安全安心な場として危機管理に努める。 ・児童には、分ると授業づくりと共に学習意欲の向上に努め、確かな学力を育てる。 ・保護者には、教育情報の提供や教育相談の充実に努め、信頼される学校づくりを目指す。 ・教職員には、校内研修や自己評価システムを活用し、資質能力の向上と共に学校組織の活性化を図る。また子どもと向き合う時間を大切にした指導を心がける。

学級数	7学級	児童数	９４人
職員数	12人	家庭数	６９戸
学校関係者評価委員	小山　悦司（倉敷芸術科学大学教授） 金川舞貴子（岡山大学大学院講師） 片山　園　（矢掛町子育て支援センター発達相談員） 出原　武重（民生委員小田分会長） 藤岡　真理子（主任児童委員） 山野　和美（学校支援ボランティアコーディネーター） 渡辺　博（小田小学校PTA会長）		

Ａ成果をあげている　Ｂほぼ成果をあげている　Ｃあまり成果をあげていない　Ｄ成果をあ

	領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	目標の達成状況及び取組の状況	検証結果
1	確かな学力の向上	基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る。	・「教えて考えさせる授業」の充実を図る。	・「教えて考えさせる」授業の校内研修や授業研究を通して指導法を改善する。 ・担任全員が年間１回以上「教えて考えさせる」授業を公開し，指導力の向上を図る。 ・ICTを効果的に取り入れ，わかりやすい授業に努めると共に，学習意欲の向上を図る。 ・モジュール学習，チャレンジ教室（夏季休業中）を取り入れて集中力を養うとともに，基礎基本の定着を図る。 □	・当該学年の国語と算数の基礎的・基本的な内容の到達度が７割以上の児童が８割を超える。 ・児童アンケートで「授業がわかる」が０%以上にする。	・単元末テストで到達度が７割以上の児童が国語は８１%，算数は76%だったが、単元末テストは活用問題も含まれているため、達成率は上がりにくかった。しかし、基礎・基本の点だけみると、どちらも達成できている。。 ・児童アンケートで「よく分かる」「だいたい分かる」が９４%。１学期より、「よく分かる」が１６%増えた。 ・校内研修や町内の公開授業への参加などにより，「教えて考えさせる授業」の指導法の改善に努めることができた。 ・１月２０日の研究会の授業公開を含め、全員が２回の公開授業を行う。 ・ICTの効果的な活用を工夫し、分かりやすい授業に努めることができた。	A
2		家庭学習の充実を図る。	・学年や個に応じた家庭学習を提示し，学習意欲を高めたり，理解を深めたりする。	・家庭学習がんばりカード等を活用し，保護者と連携しながら家庭学習の定着を図る。 ・「家庭学習の手引き」で，学習時間と具体的な内容を示し，家庭学習の充実を図る。	・家庭学習の時間を８０%以上の児童が確保できるようにする。 ・進んで自主勉強に取り組み，すべての児童が自主勉強ノートが１冊以上終わるようにする。	・具体的な「家庭学習の手引き」を各家庭に家の見える場所にはるなど個人(自主学習ノートにはる)に配布し，家庭学習の定着と充実を呼び掛けた。また，毎月，各学年の優れた自主学習を学校の掲示板や各自の自主学習ノートにはることにより，学習内容が深まり，家庭学習への意欲も高まってきている。 ・家庭学習の時間は，１０月（７１%），１１月（７６%）と目標時間（学年×１０分）を達成できる児童や達成できなくても，目標時間を意識して取り組む児童が増えた。 ・１１月の家庭学習の調査週に，地域の祭りがあり条件が悪かったが，引き続き家庭学習の充実に努めていきたい。	B
3		進んで読書に親しむ児童の育成を図る。	・読書の時間の充実や家庭への啓発により，読書好きの児童を増やす。	・読書の時間を確保するとともに，ブックトークや読み聞かせなどを取り入れ，読書への意欲付けを図る。 ・「土日親子読書」などの取り組みを実践し，保護者の読書に対する意識を啓発する。"	・図書室やブックルのを借りる冊数を，上学年は年間40冊以上，下学年は60冊以上を目指す。 ・「土日親子読書」に取り組む家庭は８０%以上にする。	・２学期途中から，図書室が使用できなかったこともあり，目標冊数にむけてペースが下がってきている児童もいる。３学期にしっかりと読書に取り組む機会を増やし，目標を達成させたい。 ・「土日親子読書」に取り組む家庭は８０%を超えているが，学年によって差がある。普段からの「親子読書」に対する声かけをしていきたい。	B
4	豊かな心と共に生きる力の育成	人権教育を通して豊かな心を育てるとともに集団行動のルールの徹底を図る。	・友だちに対してあたたかい言葉かけができる児童を増やす。 ・３つの約束（あいさつ運動・黙って集合・廊下を走らない）を守れる児童を増やす。 ・子どもの心に寄り添う教育相談や支援を行う。	・職員の共通理解の徹底をもとに，児童への指導を行い，がんばっている児童を称揚しながら，意欲を高める。 ・ソーシャルスキル教育を通して，対人関係スキルの向上を目指す。 ・縦割り班活動等での異学年集団活動を通して豊かな人間関係をつくる。 ・児童会中心にあいさつ運動を行う。 ・アンケートを基に教育相談を学期に１回設ける。	・友だちアンケートで「友だちにやさしい言葉かけをしてもらったことがある」や「友だちから親切にされたことがある」と感じている児童が７０%以上になる。 ・３つの約束が守れている児童が７０%以上になる。 ・児童会で決めたあいさつ名人の目標を８０%以上の児童が達成する。	・「友だちにやさしい言葉かけをしてもらったことがある」は７８%，「「友だちから親切にしてもらったことがある」は８１%なので、目標は達成できた。 ・３つの約束については、それぞれ９３%、９３%、８３%の達成率なので、目標は達成できた。 ・あいさつに関しては、今年度は基準を厳しくし、教職員全員が認めた児童のみを名人としたため、８０%になることはできなかったが、昨年度協みの基準で言えば、目標に到達することはできた。	A
5		特別支援教育の充実を図る。	・個々の児童の実態を的確に把握し，全職員で共通理解し，実態に応じた指導を目指す。	・「個別の指導計画」をもとに校内の特別支援教育委員会や終礼等で共通理解を図り，きめ細かい総合的な支援を行う。 ・専門機関や保護者・保育園との教育相談を随時行い，連携を深める。 ・児童の実態に応じたきめ細かな支援を行うようにする。 ・学級での取組として「きらきらみつけ」「良いところさがし」全校では「なかよし集会」「たてわり班活動」等を企画，運営する。	・個別の指導計画の見直しを学期に１回行う。 ・支援を必要とする児童の困り感が軽減したか（「学校が楽しい」「勉強が楽しい」と答える児童が増える。教育相談で困り感を訴える児童が減ったり，楽になったことを伝える児童が増えたりする状況を目指す。）　・保育園との連絡会を学期に１回もつ。・週１回の生徒指導連絡会を行い，児童の実態や困り感の共通理解を図ることができたか。	・実践計画に沿って、活動を行っている。 ・１０月までに「個別の支援が必要な児童のファイル」の追加・修正を行い、各児童に適した支援を共通理解して、教職員全員で支援・指導を行っている。 ・保育園や関係機関とも連携をとっている。 ・校内就学指導委員会までに、気になる児童の保護者と面談を重ねたり、保育園へ視察に行って、就学前の子どもの実態把握に努めたりしてきめの細かい連携を図った。	B
6		ふるさと学習を通して，ふるさとを愛する心や生きる力を育む。	・保護者や地域人材・教材を活用した授業を通して，ふるさとを愛する心や生きる力を育む。	・総合的な学習の時間で郷土の偉人（正徹），特産物（干し柿）や伝統芸能（武とう太鼓）について調べたり，触れたり，体験したりする。 ・小田朝会で地域で活躍されている方の話を聞く機会を学期に１回設ける。	・地域人材を積極的に活用することができたか。 ・２３年版漢字検定（２０問）で，児童の７０%が，下学年で８０点以上，上学年で７５点以上の得点をとることができたか。	・小田朝会では，学期に１回地域の方に話をしていただいた。ときわ会一日入学や各学年のふるさと学習も予定通り行った。加えて，家庭科や生活科でも，ボランティアティーチャーとして，地域の方に来ていただいている。 ・第１回の小田小検定では、６年生のみ達成することができた。	A
7	健やかな体の育成	目標をもってねばり強く体を鍛え，体力の向上を目指す児童の育成を図る。	５０m走とソフトボール投げ・シャトルランで自分の目標をもち，自分の記録を上回ることを目指す。 ・外遊びの奨励。	・春・秋に５０m走とソフトボール投げ・シャトルランの記録をとり，成長をみる。 ・スポーツチャレンジカードに６年間の記録を記入し，自分の成長を確認する。 ・業間運動やなかよし運動を通して，ランニングや遊具を使ってのサーキット運動等を工夫し，走力・持久力等の向上を図る。 ・体育の時間の準備運動等を工夫し，体力づくりの充実を目指す。	・５０m走，ソフトボール投げ，シャトルランの記録で，８０%以上の児童が自分の伸びを実感できたか。 ・各学年で平均が全国平均を超えることができたか。 ・体育の時間にランニングやサーキットトレーニング等で運動量が確保できたか。 ・年間を通して継続的な取組ができたか。	・秋に記録をとる５０m走，ソフトボール投げ，シャトルランについては，業間運動での体力向上に取り組んだ後の方が，よりよい結果が出やすく，児童の達成感につながると考え，３学期に行うことにした。 ・なかよし運動では，異学年交流体育や縦割り班長縄飛び，チャレンジランキングに参加するなどし，より一層意識を高めていきたい。 ・各学年の体育の準備運動では，ランニングやサーキット運動など，実態に応じた取り組みができている。	B
8		基本的な生活習慣の定着を図る。	「挨拶・早起き・朝ごはん」の習慣化を進め，特に早寝ができるようにテレビ，ゲームの時間短縮を図る。	・小田っ子がんばり表を年６回　「はっちりもくもぐツーウィーク」を年２回実施したり，学級活動で指導したりして定着を図る。 ・保健便りや学校保健安全委員会，学年便り等で保護者に実態を知らせて協力を仰ぐと共に，睡眠や食の大切さを伝える。 ・矢掛町「あはは」を毎日唱え，意識を高める。	・早寝について「小田っ子がんばり表」の実施中２日を「ぐーぐーデー」に設定し，その日には下学年は９時までに，上学年は１０時までにそれぞれ８０%以上が就寝できるようにする。 ・あはは運動が守れたという児童・保護者が８０%以上になるようにする。	・「ぐーぐーデー」を２日間設定し取り組んだ結果，１１月は，下学年７６．２%，上学年８６．３%達成できた。５日間全体の達成率も，目標時刻に就寝した児童が，下学年５９．０%，上学年８６．３%で、６月より１０%ほど増加した。 ・「あはは運動」は児童のアンケートでは、各項目ともできた、だいたいできたと答えた児童は８０%を上回ったが、「はきものをそろえる」に力を入れる必要がある。	B
9	信頼される学校づくり	保護者・地域との連携を図る。	積極的な情報公開に努める。 地域・保護者に教育活動への積極的な参加を依頼する。 「学習アシスト」型授業の充実を図る。	・学校だよりを月１回以上発行する。 ・「保護者の立場で考えられる教師」「教師の立場で考えられる保護者」を目指し，互いに情報を発信し合い協力連携していく。 ・学校支援コーディネーターとの連携を深め，学校行事や授業への積極的な参加を呼びかける。 ・ホームページや学校開放日等を活用し，小田小学校の教育活動を地域や保護者に積極的に公開する。 ・地区懇談会を開催する。	・保護者と学校が互いに情報の交流に努めていると感じる保護者・教職員を９０%以上にする。 ・学校支援地域本部の人材リストの数を昨年度より増やすことができたか。 ・ホームページを月１回以上更新したか。	・連携についても情報発信についても保護者・教職員ともに９０パーセントを上回っている。 ・学校支援ボランティアの方の働きもあり，必要な人材をタイムリーに確保することができ、教育活動に活かすことができている。 ・ホームページについては，１学期は不慣れな者が担当し，更新がはかどらなかったが，専門の方の力を借りることで問題を解決した。しかし，月に１回の更新はできてもそれ以上はできていない実態である。 ・今年度は奉仕作業の後，地区懇談会を実施し，地区の課題や危険箇所等の話し合いができ，たいへん有効であった。	A
10		学校内外の安全安心に努める。	学校内や登下校での防犯体制の見直しを行い，児童の安全確保に努める。	・児童と教師が学期に１回通学路の点検を行い，通学路マップの確認・修正を随時行う。 ・安全点検を複数の目で定期的に実施し，不具合に迅速に対処する。 ・避難訓練等により校内の防犯体制の見直しを行い，職員の共通理解を図る。 ・「小田小見守り隊」への募集を積極的に行い，保護者等と連携しながら児童の登下校の安全に努める。	・計画的または随時，点検処置が適切に行われているか。 ・地域の方や保護者と連携しながら，安全対策に努めているか。 ・不審者情報をＨＰや携帯メール配信や文書で迅速に伝えられたか。	・計画的または随時、点検処理を行ったため、大きな事故やけがもなく安全に過ごせている。 ・児童や保護者と共に学区の安全・安心マップを新しく作成し、地域の各所に配布したり大型パネルを作成して校内に掲示したりして、安全対策に努めた。	A

分析・改善方策

・１月２０日に研究発表を控え、「教えて考えさせる授業」について研修を深める中で、教職員が共通理解のもとで指導に当たり、児童には基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることができた。今後は、より確かな学力を身に付けさせるためにも活用力や共に学び合う姿勢を身に付けさせたい。
・家庭学習については充実してきた児童が増えたが、これを一過性のものにしないよう引き続いての声かけや意識付けや個への対応が必要である。
・読書活動の推進については、２学期は１１月からデータベース化の作業のため、図書室がいっさい使用できない状態になったため、町の図書館の本を学級に置いたり、会議室を使って町の巡回図書館を開いたりするなどの工夫をした。しかし、児童の読書に対する意慾がやや下がったことは否めない。家庭での読書習慣については、家庭で差があるため、「土日親子読書」を強化したりする対策をとる必要がある。
・人権意識の定着や基本的生活習慣の定着については、強化週間を設けたり，児童の委員会活動を巻き込んだり週目標などで取り上げたりして、定着を図っているが，強化週間中だけでなく、日々の繰り返しの指導が大切であり、教職員一体となっての指導が効果的であるため今後も引き続き共通理解のもと、進めていきたい。
・保護者や地域との連携は、学校便りや学級通信、ホームページなどを通じて情報を発信したり，地域のボランティアの協力を得たりして、「開かれた学校づくり」が進んでいる。今後はコミュニティ・スクールを活用し、もっと保護者や地域の意見を聞く場を設定したりして、双方向の発信・受信ができる工夫をしていきたい。

学校関係者評価

自己評価の検証結果および分析・改善方策の内容は、総じて妥当なものである。特に、「特別支援教育の充実」については、今年度は個別のニーズに対応したより一層細やかな対応がとられていたり、保育園・中学校との連携もよく図られているため、「Ａ」に近い「Ｂ」といってもいいだろう。
・ＩＣＴ機器の活用や「教えて考えさせる」授業の流れが定着し、児童は落ち着いた雰囲気の中で授業に参加している。また、今後は問題解決学習や知識・技能の活用の力を育てる授業にも力を入れて欲しい。
・アンケートのとりかたについては、経年変化を検証するには今のやり方がよいかもしれないが、ややマンネリ化している面もあるので、時には記名にするとか重点項目を絞って、回答してもらうとかの工夫も必要である。

小田小学校

専門評価

評価項目	観点	学校の現状（○優れている点　△改善が望まれる点）	改善の方向性
①. 自己評価の状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○プロジェクト方式が教職員間に定着し、先の見通しを持って仕事をするなどマネジメント意識が芽生えている。また、ミドルマネージャーを中心に年齢構成、校務分掌に配慮したプロジェクトメンバー構成がなされており、プロジェクト間のつながりや若手の人材育成にも大きな役割を果たしている。 ○自己評価の資料となる保護者アンケート等についても、経年変化が調べられよく分析されている。ただ、アンケート項目が固定化すると保護者にとってもマンネリ化する可能性があるため、このまま継続するか、項目の精選・重点化に向けて練り直すか、見直しをしてもいいのではない	
２コミュニケーション力の向上	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
３．不登校児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
④学習不振児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○子ども達に「学習のしかた」を定着させるための授業づくり（「めあて」ー「ポイント」ー「振り返り」の明確化）が全教員に意識されており、自学自習につなげる工夫がなされている。特に今年は、どの授業においても「めあて」が明確であったことは評価できる。またそれに加え、ノートテーキングの仕方にも気を配り、子どもの思考プロセスを支えるよう工夫がなされている。 ○子ども達に学力差があることを踏まえ、学習不振気味の子どもを盛り立てるよう、また子ども達が互いに引き上げられるように、ペア学習やグループ学習などの活用や机の配置の工夫が効果的になされている。 ○授業においてICTが効果的に活用されているのは注目に値する。習熟度別の材料も用意されており、個に応じた指導が行われている。良質の材料を用いることで、教員の教材作成等にかかる手間が省力化されている。 ○読書については、蔵書数も大幅に増え、学習環境は改善されている。また学校便りなど、日常的な啓発活動も行われている。今年度より、クイズスタンプラリーや「家庭学習がんばりカード」の中に親子読書の項目を設ける等、子どもの読書量アップに対して継続して新たな対策がとられているのは評価できる。	
５．学校の組織運営	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
⑥学校と保護者・地域社会等との連携協力	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○昨年度の反省をもとに、今年度地区懇談会が再開されている。保護者にとっても有意義であることから、今後も継続が期待される。 ○地域の奉仕作業への父親の参加が定着しているのは学校にとって貴重な資産である。保護者の年齢層が幅広く、教育や学校参加への温度差がある実態に鑑みると、そうした奉仕作業の機会をとらえて父親を巻き込んでいく工夫を考える余地がある。 ○他校（小北中）との交流事業を今年度より開始したことは評価できる。低学年のうちから交流をすなど、継続発展が望まれる。 △「家庭のてびき」が作成され、保護者への啓発も熱心に行われているが、いまひとつ十分に保護者の中に定着していないようである。「使わざるを得ない」状況が作れているか、もう一度見直す余地があるのではないか。	・学校からの情報提供は以前にも増して細やかに行われている。それにもかかわらず、情報を受け取っていない保護者がいることを考えると、将来的には保護者へのメーリングリストの配信といった方法も考えないといけないかもしれない。
⑦. 特別支援教育	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○個別指導計画を作成し、子どもの実態に合わせて柔軟な支援体制を整えている。 ○子どもの特性に応じ、視覚に訴えることでゲーム感覚で子どもを引き付け、楽しんでドリルに挑戦させるなど、子どもの興味関心を引き付けるメリハリのある授業づくりがなされている。 ○保護者や他機関との連携もきめ細やかにとられており、個に応じた対応ができている。その成果は、子どもの落ち着いた姿として表れてきている。 ○昨年度と比べて支援員が減少していることで教職員の負担が増えているにもかかわらず、校内運営の工夫で乗り切っている現状は評価できる。行政からの恒常的な支援を望みたい。	
８学校の総合的な状況	総じて学校の雰囲気が非常によく、子ども達と教員間の良好な信頼関係が築かれていることがわかる。また地域や保護者、他の小・中・高等学校との連携協力も継続・発展的に取り組まれており、円滑な地域教育経営が実施されている。学校運営面に関しては、校長のリーダーシップのもと教職員間で全体の方向性を揃えた取組が行われており、良循環のマネジメントサイクルが展開されている。「教えて考えさせる」授業の展開が大きな柱であり、そのための教員研修の充実と授業改善が重点項目にあがっているため、今後も課題を明確にした取組と発展を期待したい。		

来年度の重点・方針

・確かな学力の向上を目指して、児童や教師の「分かる授業」に対するとらえ方の分析をし、課題を明確にして授業研究に取り組む。

・「家庭学習の手引き」の有効な活用方法として、個人懇談に持参してもらい、それを基に話し合いをするとか「家庭の手引き」を使って家庭学習をするような宿題を出すといった工夫をする。

・「家庭読書の充実」に向けて、読書の効用を主にした講演会を開催し、児童・保護者が聴講する機会を作るとか、先進校の取り組みを取り入れるとかの推進活動を行う。

・体力づくりに関しては、年間を通した体力づくりや夏の水泳指導に力を入れる。